SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

英語科教員免許取得希望者へのフォニックス指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025372

英語科教員免許取得希望者へのフォニックス指導

Teaching Phonics to Future EFL Teachers

矢　野　　淳
Jun YANO

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

0. はじめに

本研究は，英語科教員免許取得希望者に対して，その学習歴を調査し，90分間を3回弱のフォニックス指導実践後の学習者の感想を分析し，何を指導すべきか（what to teach）を探るものである。

粕谷他（2016）は，「小学校の教員養成・教員研修に関するコア・カリキュラム」試案を発表している。その中の「3. 教科に関する科目」で，英語運用に必要な基本的な知識等の一環として，「③発音と綴りの関係」を挙げているが，具体的に何をどう教えるかについては，その雛形の提示が待たれる。

現状では，中等教育および高等教育において，多くの学習者が英単語を間違って発音している背景があり，学習者の音読の困難さ，ひいては英語によるコミュニケーションに支障をきたす問題となることが予想される。繰り返し正しく発音練習することで，単語の意味の定着・強化も期待できる。

ひらがな･カタカナ･漢字と文字の多さではるかに勝る日本語と異なり，少ない文字数で様々な環境を作ることによって単語の数を増やす英語を学ぶ上で，学習者に意識させたい日英語比較の一端と筆者は考える。

公教育において，EFL初級学習者となる小学生に対しては，その教授に関してより配慮が必要となることが予想される。特に2020年度より，外国語活動は中学年から実施される。現行の小学校の3年生の国語科の教科書では，おおよそ秋頃にローマ字を学習することになっており，外国語活動は音声中心に行い，アルファベットの提示には十分注意しないと，ローマ字より先にアルファベットを提示する結果となる。さらに，小学生に対して，中学生にこれまで発音を教えてきた方法でよいのか，異なるアプローチをとるなら，どのような教え方が効果的なのか，実践に基づいた教授法の確立が不可欠である。教員養成系大学において，英語科教員免許取得希望者に対する，より効果的なフォニックス指導の試案を本稿では世に問う。

筆者のフォニックス指導は，グリーシー他（1988）が提唱するSound Spelling Harmony（以下SSH）を基本としており，現在は母音中心である。その理由は，子音は発音のバリエーションが少ないためである。SSHでは母音の発音を表記するのに番号を用いているが，理解の補助手段として英語の読みがなに相当する発音記号を筆者は一部活用している。発音記号は，主として中学校英語科の検定教科書に使われているものを使用している。

例えば，ハイルマン他（1996）のように，フォニックスの教本･教材の中には，長母音（long vowels），短母音（short vowels）と表記しているものがあるが，本フォニックス指導においては，「長い」「短い」という表現は，別の文脈で使用する理由からアルファベット音と基本音という表現をすることが大きな特徴であり，「すべり音」の指導時には，口の中の母音の調音点を示した図を用いるなど，やや初級の英語音声学に触れる場面もある。牧野（1990）が示すように，同じ発音記号で表記される母音であっても，語末の母音が一番長く，次に長いのは有声子音が続く母音，最も短いのは無声子音が続く母音であり，この点を筆者は補足して指導している。

1. 先行研究

英語を教える立場で，フォニックス指導を行うにあたり，教員に必要なフォニックスの知識はどの程度必要なのかという問いに対して，実践者の指導内容にヒントを見出せる。手島（1997）は，綴りと発音のルールを覚えるための“Step”を59，補足的なルールを16にまとめている。矢野（1997）は，発音指導が体系的に指導できることに加えて，授業の予習時に，扱う単語のすべての発音を調べなくても，フォニックスのルールが裏づけとなり，自信を持って発音できるようになるメリットを指摘している。

2. 本研究

高校卒業後すぐに入学した平成28年度の大学1年生は，平成20年度に小学5年生，大学2年生は小学6年生であり，小学校外国語活動全面実施の平成23年度には，それぞれ中学1年生，2年生であり，公式には英語に深く接していない年齢層と考える。（平成23年度の小5・小6は，それぞれ平成28年度の高1・高2である）質問紙の回答から，マジック（サイレント）ｅの学習歴，フォニックス学習を受けての感想を分析し，考察を行った。

2.1 目的

本フォニックス指導では，英語科教員免許取得希望者のフォニックスの基本的な知識を探り，その学習後の感想から，内容の厳選及び教授法の改善に生かすことを目的とする。

2.2 対象者

国立大生115名を，英語科教員免許取得を希望する「英語科免許組」78名と，免許取得を希望しない「非免許組」37名に分けた。内訳は，1年生89名，2年生23名，3年生2名，4年生1名である。非免許組には，大学2年次に教員免許を取得するか選択するため，若干名の1年生が，進級時に非免許組から英語科免許組に移動する可能性も皆無ではない。

本調査対象者の97.4％を大学1・2年生が占めている。高校卒業後，すぐに大学に入学したと考えると，表1に示すように，一部の研究指定小学校を卒業していなければ，公式には外国語活動全面実施以前に小学校高学年であった年齢層である。

2.3 方法

本研究にかかわる調査及び指導実践は，平成28年4月から6月にかけて実施された。

手順は，「非免許組」は，教養教育英語演習Ｉの初回授業冒頭で，マジック（サイレント）

表1　調査対象者の年齢層

年度	学年	学年	備考
2016（H28）	大1	大2	
2015（H27）	高3	大1	
2014（H26）	高2	高3	
2013（H25）	高1	高2	
2012（H24）	中3	高1	
2011（H23）	中2	中3	外国語活動全面実施
2010（H22）	中1	中2	
2009（H21）	小6	中1	移行期間開始
2008（H20）	小5	小6	
2007（H19）	小4	小5	

eについて解説し，質問紙にて，その学習歴について調査した。一方，「英語科免許組」は，英語科教育法Ⅱ・英語学習法Ⅰ・新入生セミナーの初回授業冒頭で，マジック（サイレント）eについて解説し，質問紙にて，その学習歴を調査した。引き続き，90分×3回弱，フォニックスの授業を行い，その学習についての感想を自由記述で求めた。

現時点で筆者が英語科教員免許取得に必要と考え，授業で取り扱っているのは，主として以下の9項目であり，今後の指導実践にてさらに内容の厳選を検討していく。

1. アルファベットの発音及び本名とニックネーム
2. アルファベット音と基本音
3. マジック（サイレント）e
4. 単語の音節区切り
5. 音節区切りに基づく子音重ね
6. すべり音
7. 綴りの共通項（例：air，fair，hair，chair）
8. Soft c とHard c及びSoft g とHard g
9. 二連の母音字　ea，ee，ui，oa，ai，ay

2.3.1　マジック（サイレント）e」に関する質問紙調査

次の問いに対して，表3に示した選択肢で回答を求めた。（複数回答可）

（問）英語圏の母親が幼児によく教えるものにフォニックス（綴りと発音の関係）があります。次のルールはその代表的なものです。あなたに当てはまるものの番号に○をつけて下さい。

（ルール）母音が一つ含まれる単語において，最後の文字がeの場合，その前の母音はアルファベットの音である。ただしそのeは発音されない。

例：take，eve，bike，coke，cute

さらに，3回のフォニックス授業で，以下の9項目を指導し，その終了時に自由記述で感想を求め，その感想を分析した。9項目について，具体的にどのような内容を指導したかを記述する。

2.3.2 アルファベットの発音及び本名とニックネーム

アルファベットの26文字の読み方を学習した後，英単語cat を[si:eiti:]とは発音しないことを，初級学習者にいかに説明したらよいであろうか？その理由をSSHでは，アルファベット26文字には本名とニックネームがあると指導する。例えば，ATM，CD，DVD等，本来長い単語を省略した場合に文字をアルファベットの「本名」で発音し，単語を発音するときは文字の「ニックネーム」を使うことを指導する。児童・生徒の日常生活においても，友人を本名で呼ぶことはめったになく，ニックネームを用いることに例える。ちなみに，英語圏で子どもが親から本名をフルネームで呼ばれるときはだいたい叱られるときであると，異文化の一端を紹介することもある。単語catを[kæt]と発音するのをフォニックスの視点で説明すると，①単語であるため文字はすべてニックネームで読まれる②母音字aは子音に挟まれるので基本音で読む（後述）③子音字cの後ろにe, i, y以外の文字が来ると[k]と発音する（後述）の3つのルールに当てはまっている。

2.3.3 アルファベット音と基本音

母音がわずか5つの日本語に対して，一つの母音の文字を幾通りかに発音するため，母音の数が日本語より多いことを，指導の際の留意点として，初級学習者に呼びかける必要があると思われる。

ルール提示の発言例：

「ひらがな・カタカナ・漢字で表記する日本語に比べて，子どもから大人まで26文字の文字で表記する英語は，主に母音の文字を様々な読み方をすることで，発音の種類や単語の数を増やしてきました。日本語の漢字に音・訓読みがあるように，例えば，aの文字には少なくとも8通りの読み方があります。（グリーシー他1988）英語の母音の文字を，大きく二種類に分けます。（写真1）一つ目は，語末や音節末に来て，a，e，i/y，o，uの母音の文字をアルファベットの読み方でそのまま発音するアルファベット音が５つ，二つ目は，a，e，i/y，o，uの母音の文字が子音に挟まれるか，後ろに子音が続く場合の基本音です。」

2.3.4 マジック（サイレント）e

質問紙調査時に，ルールがよく理解できない学生がいた場合は，必要に応じて補足説明をする。写真2のように，街中で看板や掲示など比較的見つけやすい。「身の回りのマジック（サイレント）ｅを探せ！」というミッションのもと，家族の協力も得て，発展的な校外・家庭学習に発展させることも考えられる。「（米国出身の父）親に小学校時代に教わった。」という特筆すべき回答も１名あった。

2.3.5 単語の音節区切り

通常「音節」には母音が一つ含まれ，母音が一つの単語なら一音節，二つの母音が含まれれば二音節の単語と言う。写真3のように，一つの英単語をいくつか節のある竹に例え，これを音節に分けて音読の手がかりとする。基本は以下の3つのパターンで音節区切りを行う。

他にも音節区切りの方法はあるが，筆者のフォニックス指導では，あくまで音読するための音節区切りであり，この音節区切りを採用すれば，発音の説明がつく単語が多数ある。尚，このルールが当てはまるのは，第一・第二強勢がある母音であり，強勢の位置は指導者が示すこ

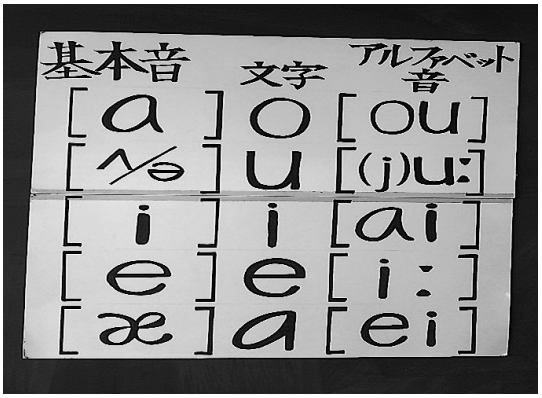

写真1　SSHで指導する主たる母音

写真2　街中で見かけるマジックｅの例

ととする。

① 母/子母　下線部の母音は音節末なのでアルファベット音　例：di/ning，la/ter，fo/cus
② 母子/子母　下線部の母音は子音に挟まれるので基本音　例：din/ner，lat/ter，swim/ming
③ 母/子le　下線部の母音はアルファベット音　例：ta/ble，ti/tle，ma/ple

特に，上記②のルールに従う身近な英単語には，sum/mer，twit/ter，*waf/fle，ten/nis等がある。*の語に関しては，すべり音のルールにも当てはまる。

2.3.6　音節区切りに基づく子音重ね

音節区切りは，まず単語の発音のヒントとして指導するが，発展活動として，発音を聞いて単語を書くことへとつなげていけることを期待している。基本音が聞こえたから，子音を重ねるのではないかと綴りに関してまず当たりをつけることを学習者に指導したい。

ローマ字の綴りと英語の綴りにおいて，子音を重ねる理由が異なることを，フォニックス指導者はたびたび呼びかけることが重要を思われる。英単語をローマ字読みしてしまった表記の例として，写真4を提示することもある。ローマ字では，促音「っ」を表記する際に子音を重ねるのに対し，英語で子音を重ねるのは，基本音で発音させるためであることを指導する。

2.3.7　すべり音

写真5の図は，英語の母音を発音する際の調音点を示している。この図は，顔の左横から見たもので，図の左側が前であり，左上に上あご，左下に下あごがある。口の中を左横から見て9つの部分に分け，英語の12の母音がどこで作られているかを表している。図中のそれぞれの母音の後ろにr，前にｗの文字が来ると，隣の母音にすべることを矢印が示している。

提示の手順としてはまず，eat→ear，chain→chair，cat→car，pool→poor，boat→boarの順で，rの文字が後ろからつくと，下線部の母音が隣の母音にすべることを確認させる。次に，car→war，dash→wash，can't→want，*what　等，ｗの文字が前から来ると，下線部の母音が写真5の表中の隣の音にすべることを確認させる。*whの綴り字は，[(*h*)w]と文字が入れ替わって発音される。

写真3　音節を竹の節に例えて説明する教具

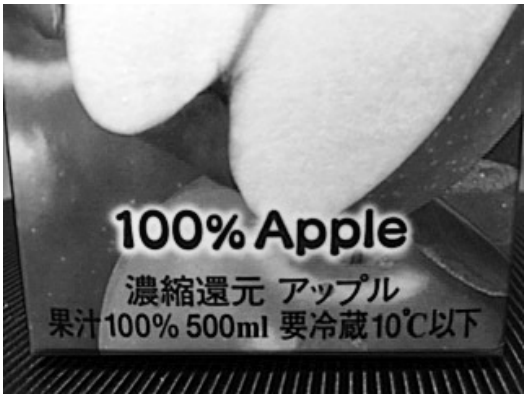

写真4　ローマ字と英語の綴りを比較した例

一連のすべり音を提示する例として，「catの旅」と題し，「cat（猫）がcar（車）に乗って旅をしている途上，争いがあっていたので，war（戦争）はいけない，と呼びかけた。」と紹介している。

[æ]が隣の[ɑ]へすべる単語例：cat→car，staff→star，dash→wash

[ɑ]が隣の[ɔ :]へすべる単語例：car→war

war（戦争）という単語に関して，多くの中学・高校生が，ローマ字を読むように「ワー」と間違って発音している現状がある。同様の例でかつ発音間違いが多い単語の例として，二音節の単語も含めて以下がある。第一強勢はwarの音節にある。

例：award，dwarf，reward，ward，warm，warn，ward，wardrobe，wharf

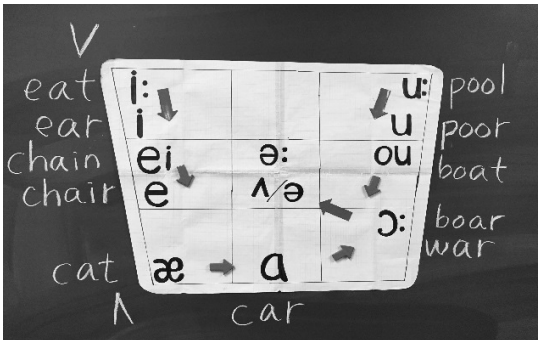

写真5　すべり音の指導板書

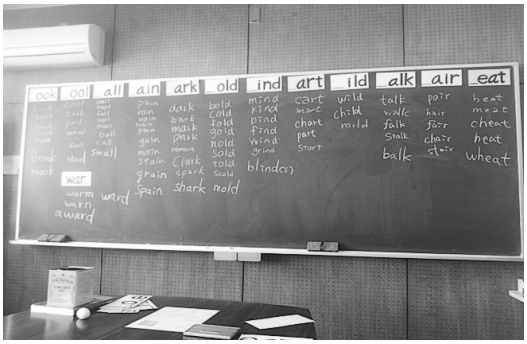

写真6　綴りの共通項を意識させる活動

2.3.8　綴りの共通項（例：air，fair，hair，chair）

ハイルマン他（1996）は，「例えばbig，ship，tin，hillという一連の単語の中には[i]が共通しているため，[i]という概念がとらえやすい」とし，この一連の単語群を「ファミリー語」として指導を紹介している。

大学生にはある程度英語の語彙力があることを前提とし，全員参加型の活動として，単語の綴りに共通項があることに気づく場を設定する。フラッシュ・カードで発音練習をした後，裏にはマグネットがついているのでカードを黒板に貼り，学生を指名して，1～2文字を加えて，

各自思い浮かぶ単語を書いていく。書かれた単語を見てさらに単語が思い浮かぶ学生が，黒板に書いていく。クラス全体で単語を増やしていく感覚が興味・関心を促す様子である。外来語として日本語として定着している単語も少なくないので，教員がヒントを出して引き出していく。（写真6）

2.3.9　Soft c とHard c（Soft　gとHard　g）

子音の発音に関しては，ほとんどの子音が文字と発音が1対1で対応しているが，子音字cとgに関しては，後ろに来る文字によって変わってくる。笠島他（2016）は，「c，gは，後ろにe，i，yがくると，それぞれs，jと同じ音で発音されることがあります。」と説明している。

ルール提示の発言例：

「子音の文字は，後ろに来る文字によって発音が決まります。つまり，cの文字の後ろにe，i，yの文字が続くと[s]と発音し，それ以外の文字が続くと[k]と発音します。二つの音のうち，比較的柔らかく響く前者をSoft c，比較的硬い響きである後者をHard cと呼びます。gの文字にも似たルールがあります。二つの音のうち，比較的柔らかく[ʤ]と響くgを Soft g，比較的硬く[g]と響くgをHard gと呼びますが，girl，get，give，giftなど，cの読みに比べて，gの読みにはルールの例外となる単語が多く存在します。」

2.3.10　二連の母音字　ea，ee，ui，oa，ai，ay

手島（2016）は，例えばsweepの母音の発音に関して，「＜ee＞はまとめて[イー]と読んで…」と，学習者に出す指示の例を挙げている。主として幼児・児童に英語圏で教えられている次の例えを筆者は活用している。

ルール提示の発言例：

「母音のai，ay，ea，ee，oa，ui については，二つ目の文字は発音されず，前の文字をアルファベット音で発音させるために存在します。“Two vowels are walking, and the first one is talking.”（二つの母音の文字が歩いており，最初の母音が音を出しています。）と英語圏では幼児・児童に教えます。例えば，語末でよく目にするayは，この二文字で一つの固まりであるため，yの文字を勝手に変えてはいけません。」（例：days，ways，plays，stays，says，delays等　例外：day→daily，pay→paid，say→said等）例外である単語は，このまま覚えるように指導したい。

3. 分析と考察

3.1　マジック（サイレント）eの知識の有無

フォニックスの基本と考えられるマジック（サイレント）e について，「英語科免許組」と「非免許組」，「すでに知っていた」と「今知った（今まで知らなかった）」のデータを，IBM SPSS Statistics 22を用いて分析し，表2のクロス集計表を得た。

英語科免許組の学生は，早期からこのルールに触れ，その結果英語学習に対する興味が大きくなり，免許取得を目指しているのではないかという筆者の予想に反して，得られたデータからは，両組の間に，統計的に有意な差は見られなかった。

この調査からは，115名中61名（53.0%）と半数を超える学生が，この授業においてマジッ

ク（サイレント）eについて初めて知ったという結果のみが明らかになり，この数字はたいへん大きいと筆者は危惧をいだく。

表2　magic e　の知識の有無

n=115

英語科	知っていた	今知った	合計
英語科免許組	40	38	78
非　免　許　組	14	23	37
合　　計	54	61	115

χ^2=1.821，df =1，p =.177，ns

矢野（1999）では，マジック（サイレント）e　について同様の質問紙調査を行っており，この調査では368名中217名（59.0％）の大学生がマジック（サイレント）e　を初めて知ったと回答している。17年の年月が流れても，5割から6割の大学生が，このフォニックスの基本的なルールを，大学入学以前に学習してこなかったことが明らかにされた。

3.2　マジック（サイレント）eを誰に，いつ習ったか

次に，マジック（サイレント）e　を大学入学前に習ったと回答した学生に，誰に，いつ習ったかを調査し，表3に示した。

表3　　マジック e を誰に習ったか？（複数回答）

		英語科免許組	非免許組
1	今初めて知った。		
2	中学の英語の先生に習った。	18（45％）	6（42.9％）
3	中学時代, 学校以外の教育機関（家庭教師を含む）で習った。	4	2
4	中学時代，独学で読んだ本で知った。		
5	高校の英語の先生に習った。	18（45％）	4（28.6％）
6	高校時代，学校以外の教育機関で習った。	3	
7	高校時代，独学で読んだ本で知った。	5（12.5％）	
8	高校卒業後，大学に入るまでに，学校以外の教育機関（家庭教師を含む）で習った。		1
9	高校卒業後, 大学に入るまでに, 独学で読んだ本で知った。	1	
10	その他（　　）	10（25％）	2
		n=40	n=14

3.3　フォニックス指導の感想

次に，自由記述によりフォニックス指導に対する感想を学生に求め，回収した77名分の感想を分類した結果を以下に示す。（複数回答）

音節区切り・子音を重ねる理由　　24名（31.2％）
将来聞かれたときの準備・自信　　20名（26.0％）

法則・ルールへの驚き・感動・発見・面白さ・納得等	57名（74.0%）
Soft c と　Hard c	6名
マジック（サイレント）e	7名
もっと学びたい・頑張りたい	20名（26.0%）
今すぐ他者に伝えたい	3名
批判的感想	8名（10.4%）
すべり音	2名
共通項	5名
センター試験前に知りたかった・テストに役立ちそう	4名

3.3.1　好意的感想の一部

概ね好意的な感想が多数を占めていた。新たな発見との記述が多かった。

・特に面白かったのは，スウィミングをswimmingと書く理由です。中学校の時，先生に「とにかく（mを）2つ書きなさい。」と言われて，（中略）まさか理由があったとは驚きです！

・単語１つ１つで覚えるより，それぞれにつながりをもたせ，意味や発音の理由があると納得することができ，その納得のつみかさねで英語の学習が楽しくなるのではないかと思いました。

3.3.2　批判的感想の一部

発音記号に関する感想は想定していた。必要最小限の数にした旨、さらに呼びかけたい。

・大学生は（発音）記号を習って分かっているので，何も分からない中・高生にこのまま説明しても伝わりにくく，難しいなと感じた。

・１つ１つの内容が難しくて聞いてもわかりませんでした。表の見方もいまいちわからなかったです。もっと参加型にして欲しい。聞くだけではねむたくなります。

4. 本研究の限界とフォニックス指導の課題

本研究の限界として，マジック（サイレント）e　に関して，いつ，だれに習ったかという質問への回答は，あくまで自己申告であり，母集団の人数も十分ではなかった点を挙げたい。また学生のEFL　学習歴についても，より厳密な調査が必要であった。

フォニックス指導の課題としては，例外的な発音について，学習動機を低下させないよう学習者にいかに指導するかという点が挙げられる。実際，「例外が多い。」と不満を訴える学習者も少なくない。また，学習する単語の数が多くならないうちに，ルールを提示してすでに外来語として日本語に定着している単語を例に出し，ルールの定着・強化をはかる指導法は演繹的アプローチと言えよう。それに対して，学年が進み，ある程度単語が出揃った学習段階で，学習者にルールを発見させる指導は帰納的アプローチと言えよう。多くのEFL教材は，フォニックスのルール提示を前提に構成されているわけではないので，帰納的アプローチは導入が困難と思われる。本実践は演繹フォニックスであるが，学期初めに理論的要素の強いフォニックスのルールの提示に時間が費やされるので，学習者があきてしまい学習動機の低下を招く可能性が生じるデメリットも考えられ，筆者の予想に違わず，今回の指導に対する感想の中にも，その点を指摘するものもあった。

また英単語の「読み仮名」に相当する発音記号の提示数は最小限に抑えてあるが，一部使用せざるをえないことも今後検討する価値がある。文部科学省（2015）が施行している現行の中学校学習指導要領（外国語）には，「発音と綴りとを関連付けて指導すること」としており，発音記号の扱いに関しては，「音声指導の補助として，必要に応じて発音記号を用いて指導することもできる」としている。英単語の読み書きまで含めて，小学校高学年で教科とする場合，中学校同様，発音記号についても検討される必要が考えられるが，発音記号の数は最小限に抑え，ルールを定着・強化することで単語を音読できるよう指導したいと筆者は考える。また，写真5の図にはなかったが，[au][ɔɪ] 等の母音の扱い，強勢のない音節に含まれる母音の多くが[ə]（schwa）の発音になることも，その提示の適否に検討の余地がある。

5. フォニックス学習のルーブリック試案

フォニックス学習に関して，表4 に示すように，ルーブリック試案を作成した。フォニックス学習に際し，ルールの例外となる単語は取り扱いが難しい。例外の存在ゆえ，学習者が混乱したり，学習意欲の低下につながったりするケースも見てきた。特に，中学1年生の教科書に出てくるような比較的易しい単語に多くのルールの例外が出てくる。そのため，「例外が多く，覚える気がしない。」と筆者がフォニックス指導をしていた中学生から訴えが起こることも少なくなかった。そのようなときは，「君たちは校則（ルール）をすべて守っているか？」と問いかけ，答えに窮させてその場を収めることもあった。

このルーブリック試案では，原則的なルールに熟達することに加えて，ルールの例外となる発音の単語を挙げられることを，多くの場合，最高レベルの5とした。フォニックスにおけるルールの例外をポジティブにとらえたいねらいがある。将来的には，小学生向けルーブリックの作成も試みたい。

表4 フォニックス学習のルーブリック（Version 1）

	1	2	3	4	5
アルファベットの発音及び本名とニックネーム	アルファベットの発音ができないか，間違ってする。	アルファベットの発音ができないか，本名とニックネームがあることを理解していない。	アルファベットの発音ができ，本名とニックネームがあることを理解している。	後ろに続く子音によって，前の母音の発音の長さが変わることを理解しているが，発音に反映できない。	後ろに続く子音によって，前の母音の発音の長さが変わることを理解し，発音に反映できる。
アルファベット音と基本音	母音の文字に対応したアルファベット音と基本音を発音できないか，間違ってする。	母音の文字に対応したアルファベット音と基本音を発音できる。	語末・音節末は前者，母音の文字が子音に挟まれば後者で発音するルールを説明できない。	語末・音節末は前者，母音の文字が子音に挟まれば後者で発音するルールを理解して説明でき，発音できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。

マジック　e	ルールに沿った単語を音読できないか，間違ってする。	ルールに沿った単語を音読できるが，そう発音する理由を説明できないか，間違っている。	ルールに沿った単語を音読でき，そう発音する理由を説明できる。	ルールに沿った単語を書くことができ，そうつづる理由を説明できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。
単語の音節区切り	示されたルールに沿って単語の音節区切りができないか，間違ってする。	示された一部のルールに沿って単語の音節区切りができる。	示されたルールに沿って単語の音節区切りができるが，発音できないか間違ってする。	示されたルールに沿って単語の音節区切りができ，発音できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。
音節区切りに基づく子音重ね	音節区切りに基づく子音の重ね方が，ローマ字の重ね方と異なることを理解できないか，誤解している。	音節区切りに基づく子音の重ね方が，ローマ字の重ね方と異なることを理解でき，説明できる。	音節区切りに基づき，子音を重ねることができないか，間違ってする。	音節区切りに基づき，子音を重ねることができる。	ルールの例外である単語を挙げられる。
すべり音	すべり音のルールを理解できないか，誤解している。	すべり音のルールを理解でき，例を1組挙げて説明できる。	すべり音のルールを理解でき，例を2組挙げて説明できる。	すべり音のルールを理解でき，例を3組以上挙げて説明できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。
つづりの共通項	つづりに共通項があることを理解できないか，説明できない。	つづりに共通項があることを説明でき，1組の例を挙げられる。	つづりに共通項があることを説明でき，2組の例を挙げられる。	つづりに共通項があることを説明でき，3組以上の例を挙げられる。	つづりに共通項があることを説明でき，例外である単語を挙げられる。
Soft c と Hard c	ルールを理解できないか，誤解している。	ルールを理解し，説明できる。	ルールを理解し，例を挙げて説明できる。	g の文字についても，似たルールがあることを理解し，例を挙げて説明できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。
二連の母音字	ルールを理解できないか，誤解している。	ルールを理解し，説明できる。	ルールを理解し，例を挙げて説明できる。	ルールに基づいて，語末が ay の単語の活用つづりについて例を挙げて説明できる。	ルールの例外である単語を挙げられる。

6. 結論

大学の授業の一環として行っているフォニックス指導であるが，学生が英語科教員免許を取得し，将来小・中学生にフォニックスを教える際のモデルとなることを意識している。現状では，筆者はこのようなフォニックス指導を行っているが，学習者から指摘を受けたように，さらに活動的要素を取り入れるなど，内容の取捨選択，ルール提示の手順・方法など改良の余地があると思われる。さらに，次年度よりルーブリック試案を活用し，指導者のみならず英語初級学習者への応用も検討する予定である。

5割を超える大学生が，大学入学以前にマジック（サイレント）eに熟達しなかった，あるいは発音はすべて丸暗記と思い込んでいた単語に，ルールや共通項があることに多数の学習者が驚いたことに象徴されるように，EFL学習の早期よりフォニックスを学習する意義は大きいと思われる。例えば，100語の英単語に対して100個の発音をすべて丸暗記するのではなく，綴りと発音の間にはある程度法則化できることを意識することは，小学校の段階から学ぶことは英語綴りと発音のみならず，あらゆる生涯学習にも有益であると思われる。

また，学校における正規の授業時間内では，どうしても知識の確認・強化に必要な時間に限りがある。そこで，家庭学習や通学時や校外学習時に，フォニックスのルールで音読できる英単語探しの活動も考えられる。街で見かける英単語が，学校で学習したフォニックスのルールで音読できることは，学習動機の維持・向上につながることが期待できる。

すべての単語の発音を丸暗記していなければ音読できないと感じさせるのではなくて，手持ちの知識で新たな単語の音読に挑戦して行けるという認識を小学生時代から持たせることは，未知のものに対応していく必要がある子どもの知的成長に大きく貢献すると固く信じている。国際化がさらに進む時代において，英語に加えて次なる外国語を学ぶ必要が生じたときにも，その学び方に応用できることを確信している。

引用文献

グリーシー，P. V.・矢ノ下良子（1988）．vii.『SSH・指導書（Teacher's Manual)』，SSH英語研究会.

ハイルマン，A. W.・松香洋子（1996）『フォニックス指導の実際』，67. 玉川大学出版部.

笠島準一（代表）（2016）．『NEW HORIZON English Course 1』，149. 東京書籍.

粕谷恭子・臼倉美里（2016）．「小学校の教員養成・教員研修に関するコア・カリキュラム」『英語教育』6月号 Vol. 65，No. 3，32-34. 大修館書店.

文部科学省（2015）．『中学校学習指導要領（外国語)』，110. 東山書房.

手島良（1997）．『スラすら・読み書き・英単語』，3. NHK出版.

手塚良（2016）．「単語の発音に必要な練習とは」『英語教育』9月号 Vol. 65，No. 6，14-17. 大修館書店.

牧野勤（1990）．『英語の発音 指導と学習』，128-129. 東京書籍.

矢野淳（1998）．「英語学習入門期におけるフォニックス指導」『日本教材学会 年報』第9巻 No. 31，25-27. 日本教材学会.

矢野淳（1999）．「静大生の大学入学以前における英語科授業の実態に関する一考察」『教育学部研究報告』No. 31，217-225. 静岡大学教育学部.